

# 立ち退き迫られるアパート住民

## 国立競技場建て替え問題

二〇二〇年東京五輪の開催に向け、国立競技場が建て替えられる。デザイン案の選考過程の不透明さや景観上の悪影響以外にも問題があり、「国立」なのに、なぜか開発は周辺の東京都有地にもまたがっており、都営住宅の住民は立ち退きを迫られる可能性が大きい。国際的イベントの再開発で、社会的弱者が排除される例は少なくない。東京五輪でも繰り返されるのか。

(白名正和)



都営霞ヶ丘アパート（手前中央）と国立競技場  
＝東京都新宿区で、本社ヘリ「おおづる」から

# 五輪の理念どく

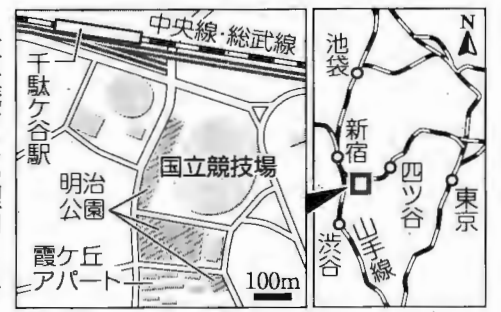
「納得できる説明がないまま立ち退きを迫られ、不安を感じている」「向こう二軒隣の暮らしができるコミュニティが壊れてしまふ」

国立競技場の建て替えに伴い取り壊される予定の都営霞ヶ丘アパート（新宿区）の住民らは十五日、都庁で記者会見を開き、不安を口にした。都のこれまでの説明は不十分で、意見を聞いてもらえていないという。

### 32世帯が

### 「このまま」

茨城大の稲葉奈々子准教授（社会学）が六～七月、住民にアンケートしたところ、四十一世帯が回答し、約八割の三十二世帯が「このまま暮らしたい」と回答した。六割以上の二十七世帯に七十歳以上があり、約半数の二十一世帯は四十年以上、霞ヶ丘アパートで暮らしていた。



住み続けたい理由としては、「アパート内や近所に知人がいる」「引越し先での新生活が不安」が多かった。「近くに住む八十八歳の姉の面倒を見ないといけない」「他地域での生活環境の違いについていく自信がない」という声もあった。

建て替えを手掛ける独立行政法人「日本スポーツ振興センター」（JSC）によると、五輪メイン会場にふさわしいように客席数を五万四千人から八万人へ増やすため、敷地面積を現在の約一・五倍の約十一万三千平方メートルに広げる。明治公園が新競技場にかかる一方、霞ヶ丘アパートは公園になる見込みだ。競技場とを結ぶ陸橋がかかる重要な「関連施設」だという。

霞ヶ丘アパートは一九六〇年から六年間かけて十棟が建てられた。都営住宅の整備などを管轄する都住宅整備課によると、今春までは約二百世帯が住んでおり、半数以上は高齢者とみられる。老朽化が進み、補修や建て替えが検討されていたが、二〇二二年七月にJSCが、敷地を新競技場の関連施設として使うことを決定した。

以前から都も競技場の建て替えを希望していた。都は応じる形で、霞ヶ丘アパートの住民を、近隣の三つの都営住宅に移すとしていた。

都住宅整備課によると、一二年夏に住民説明会を実施しており、「その後も町会と連携を取りながら話をまとめている」という。

だが、住民らとつくる「霞ヶ丘アパートを考える会」に参加する自立生活サポートセンター・もやいの稲葉剛さんは「新しい土地での生活にはさまざまなハードルがあり、築いてきたコミュニティも維持するのは難しい。移転先があるからすぐ移る、というわけにはいかない」と説明する。